

新潟の独特遺産である六斎市を通じた地域振興メニュー開発 ～六斎市の現況調査と六斎市ツアー実証実験～

(正) 吉田秀樹 (八千代エンジニアリング株式会社)

1. まえがき

新潟県の信濃川・阿賀野川流域・日本海沿岸等に定期市(六斎市)が60か所以上存在する。特に水運・海運の港のあった在郷町や湊町に多数存在する。六斎市は近代まで全国に存在したが、現在では新潟県・秋田県・愛知県等一部地域だけで、多数存在するのは新潟県のみである。新潟県の六斎市には現在も多数の買い物客が訪れ、地域振興メニューとして有望と考えられる。

一方新潟県において、近年六斎市に関する全体的調査は実施されていない。出店者も高齢化し、現在のうちに記録に残すことが急務である。

このため、新潟の独特遺産である六斎市について、今回県内の現状等の悉皆調査、全国の六斎市の分布調査を通して、新潟の六斎市の独特性を明らかにし、内陸水運と関連付けた「六斎市ツアー(社会実験)」を企画し、地域振興メニューを提案した。

注)市には、毎日市、週市(曜日開催)、六斎市(月6回開催)、三斎市(月3回開催)、年市(毎年特定の日に開催)がある。六斎市とは、例えば2,7,12,17,22,27のように、2と7の付く日、月に6回に市が立つ定期市。中世より見られる。今回の調査対象は、毎日市、週市、年市を除いた定期市。

2. 研究内容

2.1. 研究の構成

研究内容として、全国の六斎市調査、県内の定期市の悉皆調査と分析、「新潟からの六斎市買い物・交流ツアー」(実証実験)の企画・実施・分析、地域振興メニューの提案を行った。

2.2. 六斎市調査(全国)

以下の2項目を実施した。

①WEB 調査

吉田の調査¹⁾では、近代、全国に多数の六斎市等定期市が存在していたことが判明したので、今回その中で現存していると考えられる地域の定期市をweb調査した。

②現地調査(秋田県・岩手県定期市調査)

全国の中で新潟県と同様定期市が多数残っている秋田県横手盆地を中心に、定期市(沼館、浅舞、十文字、増田、西馬音内)及び内陸水運の履歴等を調査した。(写真-1)



写真-1 増田朝市の様子

(結果と課題)

全国のweb調査の結果、わかったことは以下の通りである。

①webで調べた結果、三河、秋田地方には多数の定期市が残っている。名称、開市場所も地方によりかなり異なる。例えば、名称は、岩手・米代川地域は「市日」、横手盆地は「朝市」である。

②三河地方については、歴史も不明なところが多く現地調査が必要である。

秋田地方での現地調査結果、わかったことは以下の通りである。

①定期市振興に対する行政の対応が多数みられる。例えば、定期市振興のため、道路以外の用地確保、駐車場、トイレ、屋根等の環境整備なされている。また、定期市の歴史、市神など市の成立等に関する案内看板等が多数見られる。

②河川等を利用した内陸水運と町の成り立ちに関する説明看板等が多数みられる。

③webやテレビでの地域紹介において、町並みとともに六斎市も紹介される。

④定期市は、近年、市数の減少、出店者、客の減少が著しい。

⑤減少の理由として、ショッピングセンターのほかに直売所、特に道の駅の影響が大きい。

2.3. 六斎市調査(新潟)

実施項目と内容は以下の通りである。

①新潟県に六斎市が多数存在する理由

石原の論文²⁾より調査した。理由として、蒲原平野での点在と競合回避、低い出店経費、高い現金取引、商品比較が可能、常設商店の「掛け売り」に対しての現金購入が大きな要因だった。しかし、近年は、低い出店経費と現金取引以外はその前提が大きく崩れつつある。

②調査票による現況調査(7月から9月)

表-1の項目について調査票による調査を69箇所の市について、主に管理している市町村に対し実施した。調査対象69カ所のうち、回答のあった市全体61カ所、定期市54カ所、六斎市40カ所の3通りで集計分析した。

表-1 調査票の調査項目

調査票調査項目
質問 2-① 定期市の種類
質問 2-② 開市時間
質問 3 開市場所 (追加質問で場所の選択肢を提示)
質問 4 管理者形態
質問 5 ①登録店数 ②平均出店者数 ③出店者増減
質問 6 販売品目、商品の特徴
質問 7 ①1回あたりの来客数、②来客数増減
質問 8 ①課題、②新たな取り組み

(県内六斎市調査結果)

①新潟県内には六斎市を含む市は61カ所あり、そのうち定期市は54カ所、さらに六斎市は40カ所あることがわかった。依然として県内には多数の六斎市があることがわかった。その魅力は、新鮮・旬な野菜・果物の出品等があると思われる。

②水運との関係については、六斎市はすべて河川沿いに立地していること、また7割近くが江戸時代から続く六斎市であることが確認できた。(表-2)

表-2 定期市・六斎市と水運との関係

地域	全体		六斎市(河川+海)/全体		河川/(河川+海)		河川/六斎市		(江戸以前+江戸)/六斎市	
	箇所	割合	箇所	割合	箇所	割合	箇所	割合	箇所	割合
新潟	14	100%	14	100%	14	100%	13	100%	11	85%
下越	15	100%	15	100%	14	93%	13	100%	8	62%
中越	12	100%	11	92%	11	100%	10	100%	7	70%
上越	5	100%	5	100%	5	100%	4	100%	1	25%
佐渡	8	100%	8	100%	2	25%	0	0%	0	0%
	54	98%	40	98%	46	87%	40	100%	27	68%
						100-75%		74-50%		49-25%

③しかしながら廃止もしくは不明の市は、定期市で9カ所、六斎市で7カ所と2割近くが廃止されている状況にありかなり厳しい状況である。

④六斎市等定期市においても定期市活性化への取り組みが半数の市でなされていることは注目に値する。特に、従来の定期市が毎年の登録制が基本である中、登録外の者が出店をしている「三条マルシェ」や「葛塚市」の取り組みは、六斎市等定期市のそもそもの形態を大きく変える要素を含んでいる。

(出店者数の推移)(図-1)

①出店者数の推移については、昭和61年まではかなり高水準を維持していたが、平成20年、今回の令和3年になるに従って急激に減少している。②出店者数の減少の理由として、現地調査や調査票調査によると、出店者の高齢化による要因が最大と思われる。若手の新規出店者が少なければ、高齢化による出店停止による減少が進む。これが六斎市等定期市衰退の最大の原因と思われる。③さらに近年の商業形態の変化が大きいと思われる。これまでは常設店舗との差別化で六斎市等が存続できたが、近年の、スーパー、大型ショッピングモール、道の駅、農産物直売所等の出現により、支払い方式等商業形態等差別化ができなくなっている。

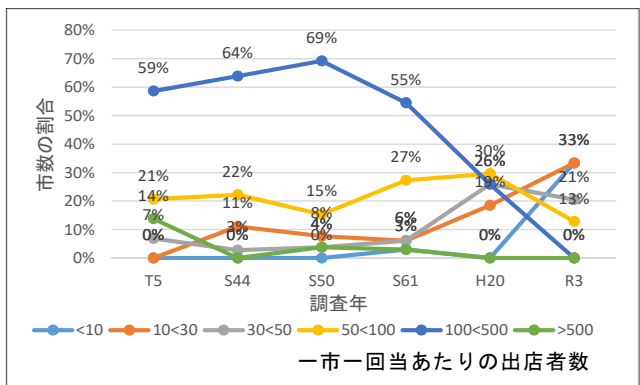


図-1 出店者数帯の六斎市市数の割合の推移

(便利ツールの作成)

定期市に訪れる人の便利ツールとして、一覧表及び定期市カレンダーを作成した。

2.4. 地域振興実証実験（六斎市モニターツアーの実施）

今回の実証実験は以下の4項目を確認する必要があり実施した。

- ①六斎市・水運と関係した町の発展の歴史に関して新潟市民に認識されているかの確認。②六斎市ツアーが魅力的か否かの確認。③水運との関係も考慮した町歩きとセットにした六斎市ツアーが可能かの確認。④六斎市ツアーが地域振興のメニューとなるか否かの確認。

(1)実施内容（写真－2）

水運と町立てとの関係が深い小須戸、亀田をモデルケースにしてモニターツアーを企画した。

日時は、旬の野菜・果物が出回る秋、六斎市開催と土曜もしくは日曜が重なる日時設定、として小須戸六斎市(11月13日(日))、亀田六斎市(11月23日(祝日))とした。

「市報にいがた10月号」、新潟日報(10月19日)、新潟みなとクラブHPで募集した。

モニターツアーの行程は以下の通りである。

- ・小須戸 800 新潟駅出発→850 小須戸六斎市 920→930 町歩き 1100→1140 解散
- ・亀田 800 新潟駅出発→820 町歩き→900 亀田六斎市 950→1000 郷土資料館→1150 解散

各ツアーは、新型コロナ状況下、マイクロバスで対応可能な人数(小須戸六斎市10人、亀田六斎市11人)を対象に実施し、表－3の項目についてアンケートを実施した。

(2)結果と課題

参加者へのアンケート調査結果からわかった調査4項目の結果と課題は以下の通りである。

(六斎市ツアー)

- ①参加者にはツアーは好評だった。②次回も参加希望したいという結果だった。③ツアーに関しては「町歩き」とセットがよい。④時間的には午前中くらいが妥当である。⑤有料でもよい。昼食とセットがよい。

(六斎市に関して)

- ①「六斎市自体知らない」及び「新潟が全国で最も六斎市が多いことを知らない」人がほとんどである。②新潟市民でも知らない人が多くPR、六斎市ツアーは必要である。③六斎市については、「雰囲気」「会話」が魅力である。④改善点として、店舗数の増加、価格表示があった。⑤「六斎市」との競合は「直売所」「スーパー」である。

(水運との関係)

- ①参加者は「水運と六斎市との関係」を理解した。

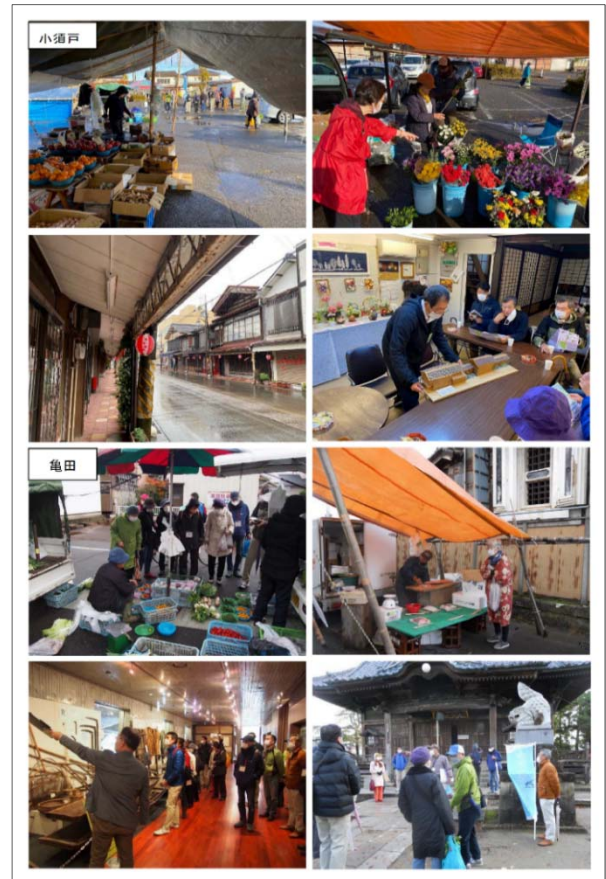
(地域振興)

- ①参加者は「六斎市は地域振興に役立つ」と考えた。②PRと「地域との共同」が不可欠である。

2.5. 地域振興への考察

(1)課題

調査結果から「六斎市の地域振興への役割」について以下のことが判明し課題が浮かび上がった。



写真－2 六斎市モニターツアーの様子
(上4枚 小須戸 下4枚 亀田)新潟

表－3 アンケート項目

調査票調査項目	
質問1	小須戸六斎市ツアーについて
質問2	六斎市について
質問3	小須戸六斎市について
質問4	六斎市と河川水運について
質問5	六斎市の地域振興への可能性について

①六斎市は地域振興に役立つ。②一方地域資源としての「六斎市」を地域振興の手段として各地方自治体は有効に利用していない。③特にPRが不足していること、自治体と地元・出店者との協働の不足が考えられる。④出店者の高齢化が大問題である。地域振興に活用する前に出店者の減少で消滅することも考えられる。⑤以上の認識から是非とも地方自治体によるPR、自治体と地元・出店者との協働、出店者の高齢化対策等が重要である。⑥六斎市調査や六斎市ツアー参加者へのアンケートから「道の駅」や「農産物直売所」との競合が大きな課題であることもわかった。

(2) 「道の駅」「農産物直売所」との比較、観光PR、出店者減少・高齢化、地域振興メニュー（「道の駅」「農産物直売所」との競合性）

六斎市の出店店舗数と「道の駅」「農産物直売所」の登録箇所の推移(図-2)、機能内容をみると、「六斎市」と「道の駅」「農産物直売所」とは競合性がある。このため、六斎市の全国での位置づけや歴史性・町の成立との関係等歴史的状況、六斎市を訪れることにより我々が感じる「六斎市は新潟の独特遺産である」との文化的認識のもと、「道の駅」「農産物直売所」との「差別化」「棲み分け」を行い、振興策を検討することが必要である。

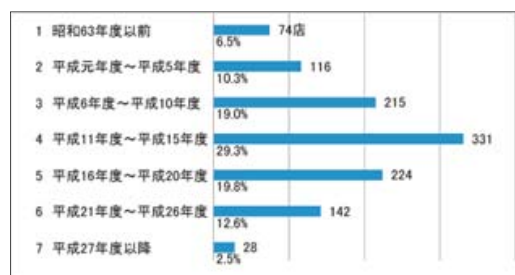


図-2 全国農産物直売所の開設年度⁴⁾

(観光PR)

テレビ等の旅番組の重要アイテムとするとともに観光パンフに説明を入れることが必要である。

(出店者減少・高齢化)

登録者以外の出店者の募集・日曜日開催の場合のマルチ等によるこれまでの開催方法の改善や工夫、出店者へのインセンティブが必要である。あわせて、出店者の意欲を増大させる来場者増大策も必要である。

(地域振興メニューの提案)

今回の調査結果をもとに、「新潟の独特遺産である六斎市を通じた地域振興メニュー」を表-4にまとめた。

3. おわりに

今回六斎市を調査できたことは、現状を記録する意味でも、今後の六斎市の地域振興への活用を図る上でも意義あることと思う。今回の調査結果は2冊の報告書等⁵⁾⁶⁾⁷⁾にまとめた。今年度以下の取り組み予定である。

①全国調査として三河地域を調査する。②新潟県外の関東地方を対象としたツアーを実施する。③ツアーは昼食を加え有料とする。

この調査は(一社)北陸地域づくり協会の「北陸地域の活性化」に関する研究助成を受けています。

参考文献

1) 吉田秀樹, 2010: 水路水位解消手段としての閘門等に関する資料収集整理, 港湾空港建設技術サービスセンター
 2) 石原潤, 1987: 定期市の研究 機能と構造, 名古屋大学出版会
 3) 新潟港湾・空港整備事務所, 2008-2011: 新潟の定期市(六斎市)巡り, 越佐みなと通信
 4) 森岡亜紀, 2018: 全国農林水産物直売所・実態調査から見える直売所の今と野菜販売, 野菜情報 58
 5) 新潟みなとクラブ, 2022: 新潟の独特遺産である六斎市を通じた地域振興メニューの開発, 新潟みなとクラブ
 6) 新潟みなとクラブ, 2022: 六斎市調査(新潟)調査票による現況調査報告書, 新潟みなとクラブ
 7) 吉田秀樹, 2022: 新潟地域の独特遺産である定期市(六斎市)の現状調査と将来に関する一考察, 土木学会 2022年度年次講演会(予定)

表-4 地域振興メニューの提案

- 六斎市の民族的・文化的・歴史的状況の認識(新潟県民・市民)
 - ・教育における総合学習
 - ・生涯学習における講座の充実
 - ・六斎市ツアーの実施
- 六斎市のPR(新潟県民・市民)
 - ・新聞・テレビ等によるPR
 - ・シンポジウム開催
- (全国)
 - ・パンフレット作成・改良
 - ・新聞・テレビ等によるPR
 - ・モニターツアーの実施
- 六斎市の充実
 - ・出店者緩和と募集
 - ・商品の充実
 - ・開催用地の確保と基盤整備